

西山砂保あてシーボルト蘭文修業証書の解読

京都大学名誉教授 松田 清

1 はじめに

2014年8月7日、艾儒略『職方外紀』（1628天啓2年成）の国内所在写本調査の一環として、鳥根大学附属図書館を訪れた。閲覧した『職方外紀』写本（1冊、128丁）には、「軍務図書」「御軍用方」「松江図書」という松江藩藩校修道館（1865慶應元年開設）の蔵書印が捺されていた¹⁾。

末尾に「文政歳庚寅季□□月□□雲藩医学教授美濃館良阜景岐課」とある巻頭の漢文前書きによって、文政13年（12月10日に天保と改元）までに、松江藩医学教授山本安良（本姓館、名良阜、字景岐）が雲州萩原の西山砂保から入手したものであることが分かった。日付の一部は胡粉の塗抹が剥奪したため消えている。塗抹された元の日付は文政「十三年十二月二十二日」と判明した。

前書き冒頭によれば、砂保は「長崎人某」から入手したという。砂保は文政8年（1825）に長崎に遊学し、シーボルトやその高弟湊長庵に西洋医学を学んだ。その長崎土産がイエズス会宣教師ジウリオ・アレーニ（艾儒略）の世界地理書『職方外紀』であった。山本安良は西洋医学にも注意を怠らなかった典医荻野元凱の門人であり、儒医でありながら幅広い知的関心の持ち主であったようだ。

思わぬところで西山砂保の名に出会い、附属図書館所蔵の砂保あてシーボルト蘭文修業証書のオランダ語が摩滅してほとんど判読出来ない状態であることを思い出した。このことは早く、米田正治『鳥根県医家列伝』（1972、今井書店）および日本医師会編集『医界風土記 中国・四国篇』（1994、思文閣出版）所載の米田正治「西洋医学の開拓者 西山砂保」で報告されていた。原文の解読がこれまでになされていなければ、この際、正確な翻刻をしておこう、と思いついた。

調べてみると、卜部忠治氏が「島根大学留学中のベルギー人マユ氏の協力を得て」解説し、翻訳を公表されていた²⁾。しかし、原文翻刻の掲載はなかった。そこで、附属図書館情報サービスグループの小豆澤悦子氏をわずらわせ、卜部氏に翻刻発表の有無を問い合わせさせていただくとともに、提供を受けた電子画像と訳者不詳の付属文書「音訳文」をもとに、蘭文の翻刻を試みた。



その後、小豆澤氏を介して卜部氏から、マユ (Jean-Marie Mahieu) 氏の原文翻刻 (タイプ原稿) と、それを掲載した卜部氏の論文³⁾をいただくことが出来た。拝見したところ、原文の解説と翻訳は必ずしも正確ではなかった。現状では資料保存の関係から原本の熟覧が出来ないため、附属図書館から撮影時期が最も古いと思われるモノクロ写真 (写真参照) の提供を受け、改めて解説を行った。

2 蘭文修業証書の解説

最初に原文の翻字と翻訳を掲げ、ついで注釈を加えよう。

翻字

Den Heer Nisijama sunah[o] Leerling van den Heer Minato Tsjoon
wordt met genoegen het getuigenis gegeven, dat dezelve zich op
de Europesche Genees en Heelwijze met bijzonder vlijt heeft
toegelegt — volgens waarheid

Jedo den 18^{de} April 1826

(封蠟印)

Dr. Philip von Siebold

Oppermeester

Lid van de Keizerlijke Akademie
der Natureonderzoeker

翻訳

ミナト・チョーアン氏の門人、ニシヤマ・スナホ氏は、みずから格別の熱意をもって、西洋の内科および外科の治療術を勉強したことを、真実に従い、賞賛をもって証明するものである。

エドにて 1826年4月18日

博士 フィリップ・フォン・シーボルト

出島上級医師

帝室自然研究者アカデミー会員

注釈

1) 文書の形式について

シーボルトが門人に与えた修了証書は本証書の他に、周防出身の眼科医岡泰安あて1通(1827年3月2日付、出島にて、早稲田大学図書館洋学文庫所蔵、本文6行)、徳島出身の眼科医高良齋あて2通(1829年10月30日付、出島にて、および1829年12月8日、出島にて、いずれも本文10行、長崎市シーボルト記念館保管)の3通が知られている。

3通ともDokumente zur Siebold-Ausstellung 1935 (Acta Sieboldiana VI, 1997) に写真が掲載されており、岡泰安あて証書は現在、早稲田大学古典籍総合データベース⁴⁾で精細画像が見られる。また、高良齋あて10月30日付証書はWeb上の長崎市シーボルト記念館常設展が画像を掲載している⁵⁾。シーボルトはこれら3通のいずれにもGetuigenis (証明書) のタイトルを書き入れているのに対し、本証明書はタイトルを欠いた簡略なもので、本文は4行と少ない。しかし、封蝋印 (wax seal、オランダ語でlakzegel) は他と同様、日付の下部に捺されている。

2) den Heer Sunah[o]の表現について

オランダ語式のローマ字では、Soenahoとすべきところを、シーボルトはSunah[o]と綴っている ([]は摩滅部分)。岡泰安あて証明書でも、周防をSoewooではなく、Suwooと表記している。シーボルトは西山砂保と高良齋には、de(n)Heer (氏) を使用しているが、岡泰安には、den Weledelen Heer (殿) と一段上の敬称を冠している。

3) 湊長安の門人西山砂保

砂保が文政8年8月長崎へ遊学したことは、本証明書の付属文書である同年「八月朔日」付の往来手形および「八月日」の「宗門證状之事」によって明かである。湊長安はシーボルト来日（文政6年7月7日、1823年8月12日）直後に、商館長コック・ブロンホフの紹介によってシーボルトの門人となった。文政8年11月に長安は長崎を立って江戸で開業し、シーボルト直伝の新療法を唱えた。

したがって、砂保が長崎で長安から西洋医学を学んだのは、長くても三ヶ月足らずであったようだ。本証明書はシーボルトの江戸滞在中（1826年4月11日～5月17日）に書かれており、その日付1826年4月18日は、和暦で文政9年3月12日に当たる。

4) met genoegの用語について

音訳文は原文のmet genoeg het getuigenis（賞賛をもって証明）を「メット ゲヌーゲンヘット ゲトイゲニス」のように単語の区分を誤って音訳している。met genoegは修了証書で成績評価を示すラテン語のcum laude（優等）に相当するオランダ語である。

証明書の本文を直訳すれば、「ミナト・チョーアン氏の門人、ニシヤマ・スナホ氏は、自身が格別の熱意をもって、西洋の内科および外科の治療術を勉強したことの証明が賞賛をもって与えられる、真実に従って」となるが、分かりやすい日本語に直した。

5) de Europesche Genees en Heelwijzeの表現について

オランダ語でEuropescheとなるべきところをEuropescheと綴ったのは、ドイツ語europäisch(e)に牽引されたためと思われる。geneeswijze（医方、内科治療方）はgeneeskunde（内科学、医学）ほど、またheelwijze（外科治療方）もheelkunde（外科学）ほど、学問的ではない。

シーボルトは岡泰安あて証明書では、zich op de europeesche Genees en Heelkunde heeft met byzondere vlyt toegelegd（ヨーロッパの内科学、外科学を格別の熱意をもって勉強した）と表記して、レベルを区別していると思われる。高良斎宛て証明書では、良斎がin alle takken van de Genees-

Heel-kruid en natuurkunde (内科学、外科学、植物学、理学のすべての分野で)「抜群の知識を獲得した」と評価している。

6) シーボルトの署名に付けられた肩書きについて

Oppermeesterは、出島のオランダ商館での役職名であり、出島上級医師と訳す。岡泰安あての証明書では、Chirurgijn majoor (外科一等医官)を名乗っている。これは軍医としての階級名である。

Lid van de Keizerlijke Akademie der Natureonderzoeker (帝室自然研究者アカデミー会員)のNatureonderzoekerはNatuuronderzoekerの綴り間違い。Lid van de Keizerlijke Akademie der Natuuronderzoekerは、シーボルトが来日以前、1822年6月26日付で、神聖ローマ帝国の帝室レオポルド・カロリン自然研究者アカデミー会員Mitglied der Kaiserlich Leopoldinisch-Carolinische Akademie der Naturforscherの免状を授与されており⁶⁾、このドイツ語の肩書きを一部省略してオランダ語に置き換えたものだろう。この帝室アカデミーの所在地は1878年にハレ (Halle) に落ち着くまでは、総裁の居住地を転々としていたため、シーボルトが所在地を省略したのは不思議ではない。

なお、オランダ語 *natuuronderzoeker*、ドイツ語 *Naturforscher*をここでは原意にしたがって自然研究者と直訳したが、英語 *naturalist*、フランス語 *naturaliste*、ラテン語 *naturae curiosus*に対応する語であり、*Akademie der Natuuronderzoeker*、*Akademie der Naturforscher*はむしろ、博物学アカデミーと訳した方がよいかもしい。

3 岡泰安あて証明書との比較

以上、比較のためにいくつかの語句を引用してきたが、岡泰安あて証明書は西山砂保あて証明書と形式、内容ともに類似する点が多いので、早稲田大学古典籍総合データベースの精細画像をもとに、以下に全文を翻刻し、翻訳を付けよう。

翻字

Getuigenis

Den Weledelen Heere Oka Taian Geneesheer

te Hilao in de Landschap Suwoo wordt hiermede
de Getuigenis gegeven, dat dezelve gedurende eenigen tyd
zich op de europeesche Genees en Heelkunde heeft met by,,
zonder vlyt toegelgt en myne te Nagasaki veziende[sic]
Operatien bygewoond _____ Dezima den 2^{de} Maart 1827.

D^r Ph. Fr. von Siebold

Chirurgyn majoor, lid van Koninlyke[sic]

Akademie der Natuuronderzoeker te Weenen, te
Batavia, te frankfurt, te Hanau etc.

翻訳

証明書

周防国平生の医師オカ・タイアン殿

貴殿はしばらくの期間、みずから格別の熱心さをもって

ヨーロッパの内科学、外科学を勉強し

長崎で私が監督した手術に出席したことを

ここに証明する

出島にて 1827年3月2日

博士 フィリップ・フォン・シーボルト

外科一等医官

ウィーン、バタヴィア、フランクフルト

ハーナウ等、王立博物学アカデミー会員

眼科医岡泰安は西山砂保に遅れること1年、文政9年7月25日（1826年8月28日）に故郷の周防国熊毛郡平生村を出発して、長崎のオランダ通詞吉雄権之助の塾に遊学した⁷⁾。この証明書の示すように、泰安が砂保よりも高度な西洋医学の知識を身につけただけでなく、シーボルトの外科手術にも出席していることは注目に値する。

この証明書で、シーボルトが砂保あての証明書と異なり、軍医の肩書きであるchirurgyn majoor（外科一等医官）、およびウィーン、バタヴィア、フランクフルト、ハーナウ等の博物学アカデミー会員を名乗ったことは、ヨーロッパの、とりわけフランス革命以降の軍医制度、軍陣医学の発達、18世紀

以来のヨーロッパ各地および植民地（カルカッタやバタヴィアなど）で設立された博物学アカデミー間のグローバルなネットワークが背景にある。シーボルトが多くの門人の協力を得て収集した日本の博物学標本や文物の情報は、このネットワークによって拡散した。

シーボルトによる修了証明書の授与は、高良斎のシーボルトあて蘭文書簡⁸⁾に見られるように、門人からの要請に応えたものと思われる。また、シーボルトの肩書きには、権威付けと自己顕示欲を看取することができる。

しかし、門人たちは西欧諸国の博物学アカデミーの活動、そのネットワークの意味をどの程度、把握していただろうか。高良斎あての2通の証明書は署名のみで、肩書きを欠いているが、西山砂保と岡泰安あてに書かれた2通の証明書に接して、この問いを発するのは筆者だけではないだろう。今後の課題としたい。

注

- 1) 梶谷光弘「蔵書印からみた藩校の機能について—松江藩修道館文庫印譜ならびに史料目録の作成を通して—」（島根大学教育学部附属中学校『研究紀要』第38号、1996）、参照。
- 2) 卜部忠治「華岡家門人西山砂保の足跡」（島根大学附属図書館医学分館大森文庫出版編集委員会『華岡流医術の世界』、ワン・ライン、2008）、p.184参照。
- 3) 卜部忠治「出雲近代医学の始祖『西山砂保』考」（『大社の史話』百号、1994年8月10日刊所載）
- 4) http://archive.wul.waseda.ac.jp/kosho/bunko08/bunko08_e0021/（2015.02.10閲覧）
- 5) http://www.city.nagasaki.lg.jp/kanko/820000/828000/p009216_d/img/002.jpg（2015.02.10閲覧）
- 6) 石山禎一・宮崎克則『シーボルト年表』（八坂書房、2014）、p.15参照。
- 7) 呉秀三『シーボルト先生：其生涯及功業』（吐鳳堂、1926）、「七〇。門人及び交友一」、p.669参照。
- 8) 『シーボルト関係書翰集 シーボルトより—シーボルトへ』（大鳥蘭三郎訳、日独文化協会編輯、昭和16年5月30日発行）所収のシーボルトあて高良斎書簡12通のうち、書簡番号25参照。